

令和元年6月4日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02619

研究課題名(和文) 日本語諸方言要地アクセント調査研究の集大成

研究課題名(英文) A concluding survey of accent systems in certain principal Japanese dialects

研究代表者

上野 善道 (UWANO, Zendo)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・名誉教授

研究者番号：50011375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：琉球方言では次のアクセントタイプが見つかった。那覇市方言は5型アクセントと見られ、久米島具志川方言もそれに準ずる可能性がある。徳之島浅間方言は特異な多型アクセントと解釈される。以上の結果を踏まえると、従来の琉球祖語3型アクセント説には、その後の展開の点で疑問が生ずることになる。本土の北奥方言は、いずれも昇り核をもつ多型アクセント体系と捉え、詳細な資料を公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

琉球諸方言での大きな成果は、これまで見つけてきた多型アクセント体系と並んで、5型かと思られる新たな体系を見出したことにある。その結果、従来の祖体系3型アクセント説は見直しが必要になる。出発点の3型体系から、Nが4以上のN型体系や多型体系への発達を説明することは困難と見られるからである。今後、新たな視点での比較研究が進むことが期待される。本土側の北奥方言では、昇りアクセント核をもつ多型アクセント体系であることを確認し、多くの資料を公開した。

研究成果の概要(英文)：In Ryukyuan dialects, we find the following types of accentual systems: The Naha dialect seems to have a five-pattern accent system, with the possibility of the Gushikawa dialect in Kume-jima having a similar system. The Asama dialect in Tokuno-shima is interpreted to have a peculiar multi-pattern accent system. Based on these observations, it is concluded that the current hypothesis that the proto-Ryukyuan had a three-pattern accent system is dubious. As for the Northern Tohoku dialects on the mainland, they are proven to have the multi-pattern system with an ascending kernel, and a lot of data are also given.

研究分野：言語学

キーワード：アクセント 沖縄那覇市方言 沖縄久米島方言 奄美徳之島浅間方言 奄美喜界島方言 琉球アクセント祖体系 本土北奥方言 中和

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語諸方言のアクセント研究はかなり進み、すでに全国的にその概略は知られている。しかしながら、その多くは一通り表面的に分かっているだけで、その体系や内部の仕組みまで解明されている方言は少ない。近年、遅れていた琉球方言の研究が急速な進展を見せているものの、そのアクセント研究はやはりまだ表面レベルに留まっている。また、琉球祖語のアクセント体系は3型アクセントであったとする魅力的な仮説も、出発点から調査の方向を制約している可能性を否定できない。祖語には3拍語までに少なくとも各3種類の対立があったことは疑いないが、それ以上の対立があった可能性も考えながら調査をすべきと考える。その上、そういう課題を抱えた方言の大半は、今や消滅の危機に瀕している。そしてそのことは、本土方言においても変わらない。調査は急がれる状況にある。

2. 研究の目的

(1) この状況を踏まえ、とりわけ琉球方言に重点を置きながら、本当にNが3以下のN型アクセント体系なのか、4型以上のN型体系や多型体系ではないのか、に焦点を当てながら、これまで十分に調査がなされていない方言を対象に据える。

(2) 本土方言においては、青森・岩手の北奥方言(県とは異なる、旧藩レベルでの津軽方言・南部方言)については、私自身の母方言が岩手県南部方言であることの利点を生かして、従来の類別語彙レベルを大きく超えた、正確で詳しい記述調査を目指し、それを通して、両方言間の異同も明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) アクセント調査の王道に従い、現地に赴いて話者に直接会って聴き取り調査を行なう。これは琉球方言も北奥方言も変わりはない。

(2) ただし、琉球の一部では、アクセント研究が始まった初期の頃に書かれた詳しい資料付き論文があるにもかかわらず、時代遅れの古いものと見なされたのか、未分析のままとなっている。それを新たな視点から分析し直した上で、次世代とはなるが、現存の高齢層話者についてその確認調査を行なう。

4. 研究成果

(1) 今回の調査で、琉球方言では次の諸タイプが見つかった。沖縄本島的那覇市方言は、フットの概念を導入して分析すると「5型アクセント体系」と見られ、なお最終的な分析を進めている段階である。久米島諸方言のうちの具志川(ぐしかわ)方言は、話者の都合がつかず、詰め調査を残したままの状態が終わったが、那覇市に準ずる体系である可能性がある。(今後、機会があれば調査をしたい。)

徳之島浅間方言は、4つの音調パターンに上げ核の位置の対立をもつ特異な多型アクセントと解釈した。(ただし、途中まで進めて放棄したフット単位での分析を今一度試みる必要があるかと今は考えている。しかし、同一音節量構造の2音節語に4種、同じく3音節語では5種の対立があり、3型体系に収まることはありえない。)

これらの他にも、従来の私の調査により、例えば、奄美大島龍郷町戸口(たつごうちょうとぐち)、奄美市名瀬芦花部・有良方言(あしけぶ・ありら、ともに式音調までもつ)、旧名瀬市街地方言、徳之島西犬田布方言(にしいぬたぶ、あるいは4型ないし5型の可能性も残す)、沖永良部島皆川方言、与論島諸方言は多型アクセント体系をもつことが分かっている。また、つい最近、沖縄本島瀬底島(せそこじま)方言も、その既存報告を分析したところ、4型以上が多型らしいとの論文が出た。上記はいずれも北琉球ではあるが、3型体系に収まらない方言がこれだけ見つかったことになる。

一方で、喜界島諸方言は3型アクセント体系であることを詳しい調査により確認した。中里方言はこれまで2型と見ていたが、新たな対立が見つかり、3型体系と改めた。これまで3型と見ていた小野津方言は、さらに詳しい調査の結果、複雑な交替現象は見つかったものの、体系としては3型であるとして間違いのないとの確証を得た。

(2) 以上のことを総合的に考えると、確かに琉球には各種の3型体系や2型体系が存在するものの、従来の琉球祖語3型アクセント説には疑問が生ずることになる。3型体系から多型体系へ、あるいはNの値が4以上のN型体系へという、より複雑な体系への発達の過程を説明する必要が生ずるが、それは極めて困難だと考えられるからである。それに代わる祖体系案を考えるためには、対応関係のより詳細な研究が必要になる。そのための出発点として、五十嵐陽介が作成した琉球諸方言同源語リストを用いて浅間方言を調査し、その全データを公表した。

(3) 今1つは本土の北奥方言である。その先行研究はそれなりにあるが、いずれも高低の調素で捉えるか、標準語アクセントと同じく下がり目(私の下げ核にほぼ相当)の視点で捉えたもので、各種の誤りや疑問と思われるものが含まれていた。今回の調査で、これらはいずれも「昇り核をもつ多型アクセント」と捉え、各種の詳細な資料を公開した。

(4) 音韻理論面では「音調の中和」を動的音調観の視点から再定義して「広義の中和」と「狭義の中和」とに分け、狭義の中和こそが真の中和であるとして、具体的な分析例とともに示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

- 上野善道, 久米島方言のアクセント資料(2), 南島文化, 査読有, 21, 2019, 83-92
上野善道, 久米島方言の体言のアクセント資料, 琉球の方言, 査読有, 43, 2019, 131-172
上野善道, 南部方言の形容詞のアクセント, 国語研究, 査読有, 82, 2019, 1-20
上野善道, これまでの琉球方言アクセント研究とこれから, 國學院雑誌, 査読有, 119(11), 2018, 97-108
上野善道, 徳之島浅間方言のアクセント資料(7), 国立国語研究所論集, 査読有, 16, 2018, 129-156, DOI:10.15084/00001611
上野善道, 与論島方言のアクセント資料(4), 南島文化, 査読有, 40, 2018, 177-188
上野善道, 徳之島浅間方言のアクセント資料(6), 琉球の方言, 査読有, 42, 2018, 137-182
上野善道, 徳之島浅間方言のアクセント資料(5), 国立国語研究所論集, 査読有, 14, 2018, 293-322, DOI:10.15084/00001425
上野善道, 青森県津軽方言のアクセント資料, ことばとくらし, 査読有, 29, 2017, 71-91
上野善道, 長母音の短縮から核が生ずるか 服部仮説を巡って, アジア・アフリカ言語文化研究, 査読有, 94, 2017, 345-363, <http://hdl.handle.net/10108/90294>
上野善道, 徳之島浅間方言のアクセント資料(4), 国立国語研究所論集, 査読有, 13, 2017, 209-242, DOI:10.15084/00001379
上野善道, 喜界島小野津方言の外来語アクセント資料, 琉球の方言, 査読有, 41, 2017, 91-117
上野善道, 喜界島小野津方言の地名複合語アクセント資料, 南島文化, 査読有, 39, 2017, 85-102
上野善道, 青森県南部方言の名詞のアクセント資料, 国語研究, 査読有, 80, 2017, 1-22
上野善道, 徳之島浅間方言のアクセント資料(3), 国立国語研究所論集, 査読有, 12, 2017, 139-161, DOI:10.15084/0000858
上野善道, 喜界島小野津方言のアクセント体系 外来語と地名語彙から見る, 音声研究, 査読有, 20(3), 2016, 95-111, DOI:10.24467/onseikenkyu.20.3_95
上野善道, 喜界島方言のアクセント資料(5), 国立国語研究所論集, 査読有, 11, 2016, 181-213, DOI:10.15084/0000847

〔学会発表〕(計 14 件)

- 上野善道, 琉球方言音声・アクセントの諸相, 第32回日本音声学会全国大会公開講演(沖縄国際大学), 2018
上野善道, 服部四郎と日本祖語, 日本言語学会夏期講座特別講演(東京外国語大学), 2018
上野善道, これまでの琉球方言アクセント研究とこれから, 沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウム基調講演(沖縄国際大学), 2018
上野善道, 特殊拍の諸問題, 日本音韻論学会2018年度春期研究発表会特別講演(大東文科大学会館), 2018
上野善道, 琉球久米島方言のアクセント, Prosody and Grammar Festa 2(国立国語研究所), 2018
上野善道, 言葉の神秘と青森アクセント, 青森県語り部ネットワーク会議講演(青森県社会教育センター), 2017
上野善道, 金田一春彦記念図書館アーカイブデジタル化事業が方言学に与える影響について, 金田一春彦記念図書館デジタルアーカイブ本公開記念シンポジウム講演(山梨県北杜市), 2017
上野善道, 音調と「弱」の関係, 日本実験言語学会10周年記念大会特別講演(専修大学神田キャンパス), 2017
上野善道, 言語に向き合う視点, 語彙・辞書研究会第51回研究発表会講演(新宿NSビル), 2017
上野善道, 日本語アクセントのとらえ方, 音声学・音韻論ワークショップ講演(北海道大学), 2016
上野善道, ことばの科学 将来への課題 総括コメント, 東京言語研究所開設50周年記念セミナー(国立オリンピック記念青少年総合センター), 2016
上野善道, 日本語の起源はどのように論じられてきたか 日本言語学史の光と影 コメンテーター(国際日本文化研究センター), 2016
上野善道, 長母音の短縮からアクセント核が生ずるか? 服部仮説を巡って, Japanese and Korean Accent: diachrony, reconstruction, and typology, AA研(東京外国語大学), 2016
上野善道, 「日本祖語について」を超えて コメンテーター, 日本語学会2016年度春季大会(学習院大学), 2016

〔図書〕(計 3 件)

沖森卓也編, 上野善道他, 三省堂, 歴史言語学の射程, 2018, 610 (394-381)

Haruo Kubozono & Mikio Giriko (ed.), Zendo Uwano et al. Berlin: De Gruyter Mouton, *Tonal Change and Neutralization*, 2017, 383 (129-155)

田窪行則・ジョン ホイットマン・平子達也編, 上野善道他, くろしお出版, 琉球諸語と古代日本語, 2016, 305 (209-234)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。